
結縁～春雷シリーズ and おまけ

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結縁〜春雷シリーズ and おまけ

【Nコード】

N0067J

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

春雷シリーズ（これで、手持ちの作品はひとまず完了です）

相変わらず花屋でアルバイトをしている千秋は、年の瀬も押し迫ったこの頃よく、誰かに見られているのを感じている。ふと振り向けば、そこにいるのはどこかヒヤリとするものを覚える一人の男。店長は心配してくれるが、肝心の恋人倉田は放っておけ、と言うだけだ。が、ついに千秋はその男にさらわれていた。

萩原千秋はアルバイト先の花屋の店先を掃除している。

背中まで伸ばしているまっすぐな黒髪を一つに束ね、俯いて箒をつかっている姿はほっそりしていた。背は、それほど高くはない。見るからに華奢な骨格と抜けるように白い肌。顔立ちは大人の女のものだが、そこにあどけない少女の表情が混じって、一瞬誰もが千秋を男とは思わない。実際、普通に歩いていても、よく女性と間違われて声をかけられる事が多い。やさしげでたおやかな、現代ではすでに失われつつある古風な美しさを千秋は持っていた。

だから、他人が自分に視線を浴びせていく事にも慣れている。普段はあまり気にもとめないが、しかしこの年の瀬に入ってからというものの、ちよくちよく同じ視線を感じては顔を上げ、そしてそこに見慣れ始めた男の姿を目にして眉をひそめるのが習慣になっていた。大晦日のその日もそうだった。いつもより数時間早く店を閉めてしまう、と店長が言うので表に出していた花をバケツごと奥にしまっている、また、その視線を感じていた。顔を上げれば、いつもの男だ。すらりと背が高く、細面の顔の中では細く切れあがった目に特徴がある。その男が花を買った事など一度もない。千秋に声をかけてくるわけでもなく、いつも千秋を距離を置いて見つめてくるだけだ。切るように冷たい大気の中、その男のコートも着ずワイシャツとスーツだけ、という姿は見る者の方が寒く感じる。千秋は黙ってその男を見て、箒を持つ手を止める。内心では、かなり迷惑だと思っていた。

視線が合うと、男は満足げに微笑する。その微笑は、暖かいとは思えない。千秋は、もっと暖かくてやさしい笑顔を知っている。それから比べれば、雑踏にまぎれるように立っている視線の先の男の微笑は、むしろ冷たい。背中に、ひやりと刃物をあてられたような気になった。

(僕に、なんの用があるんだろう……)

と、この数週間というもの千秋は考え続けて、しかし訊ねる事もせずに放つてある。恋人である倉田光太郎がそう言ったからだ。千秋にとってその恋人は、運命だ。大袈裟ではなく、この世界に生まれ落ちた瞬間から千秋は光太郎の生涯の伴侶と定められて生きてきた。その運命の言う事を、無視する事など考えもつかない。が、迷惑な視線はうつとおしくて、背後から店長が声をかけてくるのを潮に店の中に引っ込んでいた。

「掃除はもう、簡単でいいよ。それより、これね」

水仕事と草花の枝や棘で傷だらけの手には、小さなぼち袋。差し出されたそれを受け取って、千秋はおっとりした表情の店長を見る。「ちよつと早いけど、お年玉」

そんな歳ではないのに、と千秋は言っていた。千秋の見かけは、二十二、三ぐらいだ。もはやお年玉など貰うような年齢は、見かけも実年齢もとつくに越えていた。

「まあ、御苦労さん、ってという意味で。受け取って貰わないと僕がこわーい奥さんに叱られるし」

店長の言葉に、千秋は微笑む。怖い、というが身重になるまで一緒に店を切り盛りしていた妻は、店長に負けず劣らずおっとりした性分でやさしい女性だった。この秋無事に身二つになって、生まれただばかりの男の子に手こずっているらしい。

ありがとうございます、と小さく下げた頭に店長の心配そうな声が降ってきた。

「あの男性、また来ているねえ。僕はその、そういう事には詳しくないけれど。老婆心ながら言っていていいなら、僕は倉田さんの方がお似合いだと思うよ。もし迷惑なんだったら、僕がひとこと言ってみようか」

いいえ、と千秋は笑顔で店長の申し出を断っていた。

「無視しろ、って言うんです」

「倉田さんが？ そつ……それなら僕の出る幕じゃないか」

店長がここまで踏み込んで言ってくるのは珍しい。ごく普通の男である店長にとって、千秋と光太郎の世界は理解しにくいだろうと思う。それを受け入れてくれているのは、花の配達先にゲイバーや、そういう店があるためだろう。いくぶん免疫があり、上手く切り離して考える癖をつけているからだ、と千秋は思っていた。だから、何もこれまで言わなかったし、尋ねられたこともない。その店長が言うからには、よほど心配に思えるのだろう、と千秋は感じた。

「心配させて済みません」

「うん。ちよつと、ストーカーっぽい感じがしたからね」

その話はそこで終わり、あとはまたお互いに店の片付けに戻る。新しい年を迎えるにあたって、きちんとしておきたい、というのは人々の常だ。一年の埃を払い、身綺麗にして新年を迎えたい。そこには、新しい歳はもつと良い事がありますように、という願いが籠められている。

ようやく店の掃除も終えて、千秋は店長より一足早く店を出る。商店街の入口辺りにある店の周辺は、まだ買い物客で賑わっている。この客足が、数時間後にはやがて参拝客に変わる。その中を、千秋は寒そうに肩をすぼめて恋人の待つ部屋を目指していた。心の中にあるのは、恋人の暖かい笑顔。その頃にはすっかり例の男の事など忘れて、坂道の多い街の中を歩いている。歩いて40分ほどの距離を、千秋は苦にもせず歩く。遠い記憶の中にある自分はこれよりもはるかに長い距離を歩いたし、真夜中のあぜ道を奔った事もある。その頃に比べれば、日本はなんて便利になったのだろうと思う。

(変わらないのは、光太郎さんだけ)

世界がどれほど変わっても、あの恋人だけは変わらない。千秋にとっては、長い人生の中でたった一つ変わらずに輝く幸福への道しるべ。それを大事に思い、一緒に生きていけるのが歓びだ。

真つ白な息を吐きながら、千秋はせつせと歩く。寒さに鼻の頭が赤くなり、耳まで覆うようにしているマフラーの隙間から風が入り込んでくる。首をすくめるようにしながら歩いてきた千秋は、だか

らその男が声をかけてくるまでまったく存在に気づかなかつた。足を止めて、視線だけを上げる。男は相変わらず、この寒さも感じないような薄着だ。そして周囲はすっかり人通りが途絶えている。(光太郎さん。こつちが放っておいてもこうなる場合は、どうしたらいいんでしょうね)

千秋は無言で男を見る。

「あんな男などやめて、我が元に来ぬか」

初めて聞く、男の声。それはやはり、恋人とは似ても似つかぬひんやりとした声だった。それに、本能的に嫌悪感を抱いて千秋は黙って首を横に振る。心の中では、面倒な、と思っていた。

「あんな中途半端な者のどこがいい」

「全部です」

やっと、千秋は声を出す。どこが、どこか光太郎は千秋のすべでだ。いいも悪いもない。たとえ光太郎が純粹な悪であっても、千秋はついていく。それが運命だからだ。

凝視している先で、男が横を向いて舌打ちをしていた。そして、次の瞬間には千秋の細い身体は男の腕の中にいた。どうやって動いたのかわからない。それほど素早く、気配を感じさせない動きだった。呆然として見上げていると、男が冷たい微笑を見せていた。

「それならば、攫っていいこうか」

千秋は、観念して目を閉じた。こうなれば、自分の力ではどうにもならない事を知っている。ただし、心の中ではどうなっても知らない、と自分の身よりもむしろ男の方を心配していた。

倉田光太郎は、キッチンの他には部屋が二つしかないアパートで、きちんとローテーブルの前に正座をしている。部屋の中は綺麗に清められて、昨日のうちからしめ縄等の正月飾りを準備した。残っているのは祝い箸の箸袋に名前を書く作業だけだ。ゆっくりと墨をす

つて、細い筆先をそこに沈める。たつぷり墨を吸った筆を持ち上げる姿勢は、ため息が出るほど背筋も肘も形がいい。そして、しばらく箸袋の面を見つめて息を吸い、呼吸を止めて一気に筆を奔らせる。美しいくずし字は、どこかのお手本のように雄大でのびやかだ。「千秋」と書かれたそれを眺めて倉田は微笑し、次に自分の名前を書いた。

倉田は、歳の頃なら三〇代の後半ぐらい。一昔前の時代劇スターのような顔立ちをしている。上背もあるが、全体的に実用本位に鍛えられた体格だった。千秋と並べば大きく見えるが、まずは標準。眼元の穏やかな、黙っていても人を和ませる雰囲気を持っている。何でも出来る男で、アルバイトをしている古書店から千秋よりもひと足早い休みをもらった倉田は、昨日のうちにはおせち料理も用意してしまっていた。今夜の年越しそばの用意もし、雑煮の出汁も用意した。倉田の故郷では、雑煮はすまし汁に焼いた角餅。それは千秋も同じだ。それを前にすると、二人は故郷の言葉と冬の景色を思い出す。吹雪が風にあおられて地吹雪となり、白い魔物に視界が奪われてしまう事。時には睫毛までが凍って、息をするのも苦しかった事。しめった重たい雪と、腰まで埋まってしまう積雪に難渋しながら歩いた思い出は、倉田の中にくつきりと残っている。そこにあるのは、懐かしい子供の頃の思い出だ。その思い出の中には、自分のあとをくつついて歩いていた幼い千秋もいる。一まわりも年下の従弟。それが、萩原千秋だ。ただ可愛いただけだった従弟と、こうなるとは倉田も予想しなかった。しかしいまは、もはや倉田にとっても千秋は自らの運命と化している。

千秋がいればこそ、これほどの年月が経っても思い出す、凍った大地の悲しみの記憶と折り合っていた。冬の季節に目にする白い雪に、倉田は必ず朔風の吹きすさぶ世界と立ち込める硝煙の匂いをまざまざと蘇らせた。

(あの景色は、やりきれなかったな)

ため息をひとつついて、倉田は最後の箸袋に「海山」と書くことと

肘を上げていた。と、その手がふと止まる。まるで、なにかの音を聞こうとするようにその姿勢のまま、倉田は視線を虚空の一点に据えた。身体はぴくりとも動かず、筆の先からぼとり、と墨が一滴テーブルの上に落ちていた。しばらくして、倉田は動きを再開した。一気に書き上げて、コトリ、と筆を硯に置く。ゆっくりと片膝を立てて、立ちあがった。

「なるほど。今年は喧嘩で年越しか」

別に怒っている風でもなく、倉田は微笑すると綿入れ半纏を羽織って下駄を素足につっかけたまま表に出ている。

そのすぐあとには、その地帯一帯を天気予報にはない暴風が吹き荒れて、せつかくの穏やかな年越しを風雪吹き荒れるものに変えていた。

気がつくくと、千秋はどこもしれない場所にいる。天地もなく、西も東もわからない。まるで虚空に浮いているような世界は、闇の底にほのかに明るい光を秘めていた。その中でゆっくりと起き上がれば、自分の姿は絹地に銀色の刺繍がほどこされた白装束に包まれていた。束ねていた髪はほどかれて、背中に広がっている。横座りに足をななめに流した姿勢で、千秋はそれをまじまじと見る。そして、小さなため息をついていた。

(嫌いでは、ないけれど)

花嫁装束でもあるまいに、と多少うんざりしていた。恋人のために着るならば、嬉しいだろう。しかし、着せた相手は光太郎ではない。そう思っていたら、ぼう、と小さな灯りが視線の先に灯って男の姿を浮かびあがらせていた。男の装束も、白。自分と何をしようとしているかは、一目瞭然だ。千秋は不機嫌そうに唇を尖らせて、男を見た。そうなったところで倉田が自分に怒ることはないだろうが、しかし怒りの矛先はまっすぐ男に向かうのはわかりきっている。

その結果、迷惑を被るのが誰なのか、と考えれば千秋は気持ちが暗くなる。

「目覚めたか」

言いながら、男が近づいてくる。相変わらず気配も足音もしない。その男に向かつて、千秋は言っていた。

「知りませんよ、こんな事をして」

忠告をしたつもりだった。が、男は愉快そうに笑い声をあげる。

「あやつに何が出来ようか」

「そうやって、あなたにとっては退屈しのぎの遊びのつもりでも。

僕や光太郎さんにとってはそれじゃ済まない。本当に、知りませんから」

言いながらも、千秋は自分自身が不思議だった。心の底では、これを楽しんでいるのがわかる。光太郎が来てくれる事を疑ってもしないし、この目の前の男が本当に酷い事をするとは千秋は考えもしていない。原因は、この男の正体を自分が知っているからだ、と思う。この世で本当に怖いものが何かは、千秋は十分すぎるほどに知っていた。自分は何度もその中で溺れて飲み込まれ、そして死んできた。すでに覚えていないほどだ。だから、むしろ男の事は逆に恐ろしいとは思わなかった。

「ところで、ここはどこなんです？」

千秋は訊く。男は、ちつとも怯えていない千秋に不満そうな表情で、答えた。

「お山だ。お山の、ここはもう一つの世界。私の棲む場所よ」

「なんにもなくて、寂しいですね」

暗いばかりで、本当に何も無い。正直に感想を言えば、さらに男の顔が不機嫌そうに歪む。

「だからよ。だから、私も伴侶が欲しいと思ってな」

「僕は、駄目ですよ。だってもう、僕は生まれる前から光太郎さんのものだと決まっていたんだから」

そこだ、それだ、と男が苛立たしそうに足を踏み鳴らす。

「それが、気に入くわんのよ。あやつには別に、きちんとした名前があるように。何故いつまでも人間の名前であるのか。我はずっと独りであるのに、何故あやつだけに伴侶がおるのか。不公平ではないか」
知りません、と千秋は横を向く。その間も男は近づいてきて、そして千秋の二の腕を掴んでいた。力任せに引つ張りあげられて、千秋は抵抗もせず立ち上がる。男の腕の中に包まれても、もがきもしなかった。しても無駄、という頭もある。無力な自分が抵抗しても、怪我を負う。それで痛い思いをするのは自分だけだ。

(ああ、でも)

早く恋人に来て欲しい、と千秋は髪を掴かまれのけぞらされながら思う。男の顔が徐々に近づいてくる。出来ればやはり、くちづけは恋人とだけ、と望む千秋にとっては抵抗への誘惑は強い。その意思を美しい黒目に籠めて男を見る。ほの赤いくちびるを、きゅっと結んでいた。

「見かけによらず、強情そうだな」

面白そうに男が言った時だった。

「いいや、千秋は従順だ。ただし、相手を選ぶ。その手を離せ、馬鹿者」

視線を動かせば、いつの間にか倉田がそこにいた。縞の綿入れ半纏に、黒いタートルネックのセーター。足元はジーンズに下駄。男が振り向いて、その姿にうんざりしたようなため息をついていた。

「なんと……まったく、有難味のない格好だな」

「鳴り物入りで登場して欲しかったか。いいから、千秋を離せ」

そのやりとりを見て、千秋は光太郎が少しは本気で怒っている、と感じた。そして、思う。

(ああ、もう。僕はどうなっても知らないから)

これから、神様同士の小競り合いが起こる。その結果、下界に巻き起こる自然の猛威を想像すると、せつかくの晴れ着で参拝に訪れているだろっ人々の難儀に胸のふさがる気がしていた。

馬鹿者が、と倉田はいくぶん本気で怒っている。神が人攫いをするのはよくある話だが、しかしすでに伴侶の決まっている者を攫うのは、人がするより悪い。もっとも、この馬鹿が何故千秋に惹かれてしまったかは、倉田にはわかっていた。同じ属性の者同士。やはりどこかで似通うものがあるのだろう。しかし、それは倉田も同じだ。男がお山のご神体なら、倉田も東北の寒村に静かに眠る沼の主。男が蛇神ならば、倉田は龍神だった。そして千秋は、倉田のせいで「死ねない者」になっている。何度死んでも、千秋は小さな銀色の蛇になって再生した。そういう宿命を植え付けてしまった者として、倉田は千秋を守る義務を負っていた。

「いつまで経つても下界に留まって、人とも神ともならぬ中途半端なお主より、我の方がこの者にふさわしいとは思わぬか」

「思わぬね、と倉田はぞんざいに答えていた。その間に、千秋がもがいて男の手から抜け出す。たたっ、と小走りに白装束で千秋が駆けてくるのを、倉田は受け止めていた。その姿は、古い記憶を呼び覚ます。自分が出征するという前夜も、千秋は寝間着姿のままて病軀をおして夜通し寒い中を歩いてやって来た。その気持ちのあまりないじらしさに、倉田はこの従弟を抱いた。その抱いた結果が、いまの千秋だ。しかし、それも運命の約束事のひとつだったのだろう、と今では納得していた。

「それよりも、他人のものにちよっかいを出すとは心得違いもはなはだしかろうが。千秋は勢夜陀多良比売セヤタタラヒメではないぞ」

倉田が厳しく言うと、男が一瞬怯んでいた。ちよっとバツが悪そうな表情になる。それを見て、倉田は多少同情していた。日本最古の神のひとりである男は、もうずっと寂しいままなのだろう。それは、倉田にも理解出来る。日本の土俗信仰の神の人間臭さは生涯変わらぬらしい。

「寂しかったのだ」

男が、正直に言う。そして、自分の腕の中に納まっている千秋にちらりと視線を寄こすのを感じて、倉田はすかさず背後に隠していた。

「そういういじわるをせずとも、よかるうが」

男が拗ねた口調で言う。

「べつに本気で悪さをするつもりなどなかったわ。ただ、ちよつと

……」

「ちよつと、なんだね」

倉田が返す。

「ちよつとばかり、我を慰めてもらいたかっただけだ」

それが悪い、と倉田は睨みつけていた。その不機嫌さは、倉田の面を覆い始めた青黒いきらめく鱗が物語っている。瞳が金色に変化し、完全に化生すれば地上には雷鳴が鳴り響く。おそらく今でも下界は雲行きが怪しくなり始めているだろう、と倉田も自覚していた。だから、抑えている。倉田にとって人間がさまざまな営みに精を出す世界は、とても身近で愛おしい世界だからだ。そう感じていなければ、下界で人に混じって古書店でアルバイトなどしていない。千秋も同じだ。

「我はずつとひとりじゃ。姿を変えてたまに人の世界に降りても、まずまず我に気づく者も少なくなってしまうた。恋を語れる相手もない。だから」

「だから？」

倉田は続きを促す。

「ちよつと、仲睦まじいお主らを見て羨ましかっただけじゃ」

ぶい、と横を向く仕草が神とも思えず人間臭い。背後で、千秋が小さく笑うのを聞いて、倉田も微笑みそうになる。共通した人間臭さは自分にもある。千秋への固執がその現れだ。千秋を傷つける者は許し難いし、場合によっては多少のお仕置きも倉田はする。

「その気持ちはわかるが、千秋は私のものだ。そこは諦める」

言えば、その神はしょんぼりしてしまった。

「が、たまに遊びに来るぐらいはいいだろう」

言ってやると、憎々しそうに言い返してきた。

「出来るか。我がそうホイホイ出歩けば、お山が空になる」

好きにしろ、と倉田は言って再び千秋の身体を腕に納めていた。

どうなる事かと心配そうだった千秋の顔が、ほっとしたものに変わっている。それに微笑みかけて、倉田は言った。

「もう、行く。すでに祀ってくれる者のない私に比べて、しばらく忙しいのだろう。そちらに専心しろ」

忙しいな、とその神が言っていた。

「家内安全、商売繁盛……たしかに、我は忙しい。己の煩惱になど構ってられん」

「除夜の鐘を聞け」

倉田は言って、千秋を抱き上げていた。自分の首にまわってくる細い腕。着物の袖口から艶めかしく二の腕までが見えていた。その腕の内側にくちびるを押しあてて、倉田はその世界から飛んだ。

千秋の耳元を、風が鳴っている。髪が風に乱れて恋人の背中に流れていた。はるか下界にはまだ、あの神のご神体である優美な形の山が見える。周囲をやさしい山容の山に囲まれて、そして平野の中に点在する小さな山々。そのうちの一つが、三輪山。まだ大晦日のうちというのに、すでに参道は人で埋まり始めている。今日という年の改まる節目に気を遣って、恋人が地上からはるか上空を飛んでいるのがわかっていた。本来の姿にならないのも、そのためだ。恋人がいったん龍に姿を変えれば、気象が荒れる。

「光太郎さん……」

「ああ。このまま初詣に行ってしまうか」

その格好で、と千秋は思わず光太郎の顔を見る。

「どんな姿になってほしい」

「光太郎さんは、和服が似合うから。でも、僕はダメ。この格好だと目立ちすぎて」

「もつたいない。よく似合っているのに」

しかし、無理強いはしてこない。

「どこへお参りしたい？」

訊かれて、千秋はふつとあの神を思い出す。どうせなら、あの神の事を本人にお願いしてみるのもいいだろう、と千秋は思っていた。ひとりきりとは、寂しすぎる。

「もの好きだな」

光太郎が言つて、しかし千秋の望みをかなえてくれた。

やがて、参道に現れたのは白いコーデウロイのパンツに白いダウン・ジャケット姿の千秋と、大島紬に羽織姿の光太郎だ。そういう光太郎を見るのは、千秋にとっては懐かしい。遠い昔の姿を思い出すからだ。ちらほらと、闇に包まれた天から白い雪が降って来る。

それを同じように見上げて、千秋は光太郎を見る。彼が何を思い出しているか、千秋にはわかるからだ。

「光太郎さん。風はやっぱり聞こえる？」

「ああ、消えはしないだろう」

言われて、千秋は小さく俯いた。光太郎が心の中で聞いている音を、千秋もその後聞いた。そこが光太郎の死んだ場所だ、とその土地へ行きたい一心で千秋は大正元年に、満洲へ移住している。千秋の生まれは、明治十八年。光太郎はそれより一まわり前の明治六年の生まれだ。日清戦争に従軍し、その後光太郎は倉田本家の長男であつたにも関わらず、日露戦争にも従軍した。そして、朝鮮半島の付け根辺りにある旅順という地で死んでいる。光太郎が雪を見れば思い出すのは、その旅順の凄惨な風景であるらしい。その時に一度死んで、その後ふたたび千秋の前に光太郎が姿を現したのは昭和の戦争が終つた、東京オリンピックの前年の夏。それまで千秋はただ、死ねない自分の身さえ諦めて生きていた。光太郎がいなかった長い年月、千秋は幸せではなかった。だから、この山のご神体だという

神のいう寂しさはわかる。

(ひとの身なら、なおさら)

一人では生きていくのは難しい、と千秋は思う。

そつと、千秋は傍らを歩いている恋人の横顔を見上げる。いつでも暖かくてやさしい、年上の従兄。そして、自分を伴侶に選んでくれた大事な人。あまりに恋人の顔ばかり見ていた千秋は、石段に足を取られていた。小さく声をあげて、捕まるものを探して泳いだ手を光太郎が握って支えてくれる。

「ありがとう」

そう言つて離そうとする手を、光太郎が握つたままで顔を寄せてきた。触れるのは、ほんのりと暖かいかすめるようなキス。千秋はあまりの事に、他人目を気にして面を伏せていた。誰かが見たら、と恥ずかしいし恐ろしい。

恐る恐る見上げれば、光太郎は悠然と微笑んでいた。

「大丈夫だ。誰もおまえを男とは思わないから。それより、手を引いてやるう」

どうやらそれは本当らしい、と千秋は手を引かれるままに寄り添つて石段を登る。除夜の鐘が、近くにある寺の鐘楼から荘厳な響きを打ち始めていた。

「百八つの煩惱を消す鐘の音が……」

光太郎が呟く。

「それが、ひとの世のいいところだと思つがな」

言いたい事はわかる。除夜の鐘で身を清めてまた、新しい一年を迎える。そういう単純さが人間の良いところだ、と言いたいのだ。

「光太郎さん、煩惱は？」

「ある。おまえだ」

そう言われると、千秋は喜んでいいのか拗ねていいのかわからなくなる。自分がこの大事な恋人の煩惱。あまり嬉しくはない、と思つていたら光太郎が笑つていた。

「だから、俺はここに居るのさ」

この世で、同じ時間を生きられるのは一人きりだ。これからも、こうやって事あるごとに確かめあいながら人に紛れて生きていく。それも、幸せの形だ、と千秋は思いながら柏手を打っていた。

(完)

くおまけく

千秋は、目の前で一緒にこたつに入っている男を困惑した表情で眺めている。こたつの天板の上には銚子に杯、おせち料理の残りをまとめた一段のお重。その男の前で、千秋はみかんをむきながら俯いている。新年が明けてまだ三日。世間はまだまだ正月気分そのまま、商店街の初売りでも雅楽や琴の音が流れていた。

(忙しいと言ったのじゃ、なかつたんでしょうか?)

と、突っ込みたいところだが、恋人が放っておけ、と言っているので千秋は黙っている。しかし、不満が目に出てしまう。ちらり、と俯いたままで視線を上げれば、そこには白い面にぼおつと朱を散らした機嫌のいい男の顔。元から柳の葉のように細い目を、さらに細めて盃をなめるようにしていた。

(うわばみ!)

自分で樽酒を持ち込んで、それを一人で空にしていれば世話はない。もう酒がないぞ、と言つので自分の恋人は、この寒空の中酒を買いに家を出た。それもちよつと、腹が立つ。せつかくの二人で過ごすお正月。なんでこんな邪魔つけなのが現れたのだろう、と千秋はまた不満をこめて男を見た。

「なんだえ？」

それに気づいて、男が言う。いいえ、と千秋は虫も殺さぬような美しい笑顔を向けた。

そこへ、恋人の倉田が帰ってきた。恋人の姿は、相変わらずだ。ジーンズに素足。下駄をつっかけて、上はセーターと綿入れ半纏。これより薄着でも風邪などひく恐れはないが、しかし正月には不似合いな普段着姿。その頭や肩に白い物を見つけて、千秋は慌てて立ち上がると恋人に積もった雪を払っていた。

「相変わらず、仲が良いのう……。我など、空閨をかこつてもう何百年になるか。うらやましいのう」

男が言う。その口は、ようやく一斗樽を空にしてからろれつが怪しくなってきた。言うことも、徐々に支離滅裂。というか、下世話になってきている。

「訊くのを忘れておつたが。姫始めはもう済んだのか？」

背後から響いてくる声に、千秋は白い耳朶まで真っ赤に染めて恨めしそうに恋人を見る。そして、男っぽい面に苦笑を滲ませた恋人の脇腹を、肘で突いて小声で抗議していた。

「光太郎さんが、たまには遊びに来い、なんて言うから……！」

「まあ、赦してやれ。どうにも手に負えなくなれば、俺が強制的に連れ出すから」

という会話を聞けば、なにやら癖の悪い親戚の小父さんが押し掛けどもしたような感じだ。迷惑だが、むげに追い出すわけにもいかない。そんな事をすればへソを曲げてしまつて後の始末が大変になる、というところ。

「酒をつき合え、酒を！」

背後から、男がわめく。もう酒のつまみが寂しいだの、もうちょっと気の利いたものを用意出来んのか、だのとかまびすしい。千秋はため息をついて、台所に入ろうとした恋人を止める。

「僕がやります。光太郎さんは、あのうわばみの相手をして！」

怒っていた。しかし、この恋人は動じない。ゆつたりと面白そう

に微笑むと、冷たい両手で自分の頬を挟んでくる。

(……あ)

千秋は目を閉じて、自分をなだめるためのくちづけを受ける。

「怒るな」

暖かいくちびるは離されても、恋人の両手は離れない。額をこつんとつき合わせて、笑いを含みながら言われていた。

「……だって」

「どうせ、俺たちには時間は意味がないものだ。アレは、ずいぶん久しぶりの人の生活に浸っていたいのだろう。それに、蛇はもともとわばみと、相場は決まっている」

そう、確かにその通りだ、と千秋もわかっている。自分たちには時間も空間も意味がない。永遠の一对同士。同じ時間を生きていくための、選ばれた者同士はわかっている。しかし、と千秋はまたもや不満そうに考えていた。

「光太郎さん。あの人だって、そのうちの一人ですよ！」

なんの変哲もない小さなアパートの一室に、どういうわけか「神」が寄り集まっている。出雲の神有月でもあるまいに、蛇神である酔っぱらったうわばみと、竜神である恋人が酒盛りをするなど聞いた事もない。そして千秋は、その竜神の永遠の伴侶だ。

「……まさか、泊っていくなんて、言わないでしょうね」

頬を両手で挟まれながら、千秋は上目づかいに恋人の瞳をのぞきこんで剣呑な声を出す。恋人は笑うが、冗談ではない。そんな事になつたら千秋は、たとえ相手が三輪山の神だろうが首をしめてしまふ。

「大丈夫だ。そこはきちんとお帰りいただく」

きっぱり言うのを聞いて、千秋はやっと少しだけ安心した。そして、一升壇を下げた恋人を蛇神様の元へと追いやると自分は台所に立つ。大きな鉢を出してくると、そこに何種類もの漬物を刻んで盛り付けた。赤カブ、きゅうり、大根、なすび、千枚漬け。背後から、賑やかな笑い声が響いてきて、千秋はやっと、まあいいか、と思う。

(神様が不在じゃ、せつかくお参りに来た人はお願い事を聞いてもらえないかも)

そう思いながら、包丁を片づけると両手に鉢を持って台所を出ていた。

(後書き)

もしこのお正月に三輪山(大神神社)にお参りなさろう、という方がいらっしやって、万一天候が悪い場合には、倉田のせいだとお考え下さい(笑)

きっと喧嘩の最中であろうと思われます……(ぶっ・ありえね)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0067j/>

結縁～春雷シリーズ and おまけ

2010年10月8日15時26分発行